

Newsletter

MAY 1996

巻頭のことば

高村奉樹

AACKニュースレターが発刊されることになった。このところ、会員それぞれの活動状況や日常生活について、互いに限られた情報しか得られない、また山岳会自体、いったいなにを考えているんや、という疑問や不満に接することが多くなった。これはひとつには、AACKが中心になって国内外で行う遠征計画がこのところ途切れている、また日頃互いに声をかけあって山に向かうことが少なくなっていることが大いに関係しているだろう。

AACK時報第一号は一九六二年に発行された。サルトロ・カンリ遠征が実現した年である。時報は、会員相互の親睦をはかり、同時にAACKの今後の方針を相談するための部内雑誌だと思ふので、と前置きして、会長桑原武夫は、以後の遠征についてのみとしをを中心に感想を記している。そのなかで、小人数で気軽にでかける遠征の工夫も考慮してみる必要がある。もつともそうすると、京都大学という権

威をかりて全体的に動くのではなく、個人の集まりという形をとる傾向をとるだろう。(中略) しかし近代主義的個人の集まりが、前近代的同志的結合にまさるエネルギーを出しうるかどうか、日本社会の現状において、いささか懐疑的だが。(中略) また科学研究では大学の単位をこえた協力がさかんである、などなどの記述がある。その後ヤルカンには相変わらずの大型遠征隊ではあったが、ナムナニでは政治的結末の面もあるとはいえ、同志社大学との合同によって成功している。また最近ではAACKに新しく加入する会員は、京都大学山岳部出身者は少なく、他大学もしくは他の組織で活躍してきた人びとが多い。一方会員の方もまた他の研究教育機関に属しながら、南極観測の重要な役割を果たし、あるいは広域にわたる住民の健康についての総合研究を大学間協力によって推進しているなど、その活躍については皆様もご承知の通りである。

しかし京都を中心とした遠征計画も再び考える時期が来ている。かつて桑原が予測した曲がり角はすでに過ぎていくが、人の結合の形態は、桑原のいうふたつの形が内包されることになった。会の活性化のためには、単なる同志的結合では限界が有るのかもしれない。しかし昔ともに山を歩いた日々の

経験を基礎にして、さらに日常的な活動を支え合ってゆきたいというのは、率直な気持ちである。また他の大学や組織から新たに参加された会員も、あたらしく共通の経験をもつことを期待されているに違いない。そこに、新たな、近代的で同志的な結合がうまれることに期待する。

学士山岳会の目的はなにも遠征隊を送り出すことだけではない。定款の身をいままさらひきだすまでもないが、「会員相互の連絡研修をはかり、もって文化と学術の発展に寄与するとともに、自然尊重の精神を高めること」が目的として謳われている。自然尊重のためだけに山にゆくわけではないが、山を舞台に、ときには街のなかで相互の『連絡研修』が発行されることを願って、このニュースレターを発刊したい。(なおAACK時報は、遠征報告や少しまとまった論文などを掲載して発行つづけることにしたい)

終わりに、このニュースレターを発刊するまで、いろいろと検討をかさねお骨折りをいただいた、平井、酒井、薬師の各氏に感謝するとともに、会員各位には、本紙への率直なご意見と暖かいご協力が得られることを心から期待して、発刊を祝いたい。

梅里雪山計画

その後

一九九一年一月三日から四日にかけて、C3を襲った雪崩は、日中あわせて十七人の隊員の仲間の命を奪い、我々に大きな衝撃を与えた。

梅里への挑戦は、彼らの遺体が発見されていないという重圧、ルート上の危険性、日中合同の枠という問題などから、早急には動くことはできなかった。しかしあれから五年を経て現在、やっと若手の方からの機運が盛り上がり、どうしても今年末には再挑戦を実現したいという希望があり、それを受けて、紆余曲折はあったが、ヒマラヤ委員会ですべて中国側と交渉することに決定した。その概要を以下に説明する。

一、梅里雪山合同登山隊事前協議訪中団の派遣

(96. 2. 3—8)

交渉

日本側… 吉田與和、倉智清司、人見五郎、

西川真子(通訳)

中国側… 李致新、于良璞、金俊喜、陳尚仁、

李豪傑、張俊、曾曙生

(吉田はAACCK会員ではないが、中国通であり、顧問の形で派遣した)

(二) 会談における大枠の確認事項

(1) 日中合同登山隊として登山隊を組織

(2) 登山時期は一九九六年十一月—十二月

(3) 京都大学が主(登攀)、雲南省は副(後方)、CMAは両者調整。

(4) 経費の主体は京都大学が負担。ただし中国側は経費節減のための努力をする。

(5) 日中合同登山隊は「登山第一」「小數精銳」を旨とし、「搜索」は積極的にには行わない。

(6) 現地における小數民族問題、民族感情に十分配慮する。

(二) 北京・雲南・京大の意見

三者ともおかれた状況が異なっているため、日中の関係だけでなく、北京・雲南の関係も微妙であった。

(1) 北京(CMA)

窓口は于良璞。中国登山協会(CMA)は本年の年次計画がすでに作成され、隊員を派遣する余裕がない。経済的な余裕もない。

計画の一年延期の話もしたが、今年は七回忌でもあり、ぜひ今年という日側の説得に依じてくれた。CMAとしては、二次隊隊員、遺族との関係を重視しており、三次隊としてはあくまで登頂することで、二次隊の意志を達成したいとの意見であった。隊の主目的は登山であり、搜索は行わない。なお遺留品が見つかった場合はその時の条件で対応する。なお遭難以降の京大の対応に非常な不信感を持っており、このことを会談の随所で表明した。

(2) 雲南省

遭難以後の京大の取り組みが不十分だった。さらに時間が経つと様々な難しい問題(徳欽、他からの申請など)が生まれている。いちばん難しい

問題は「小數民族問題」。迷信的な徳欽住民の説得、さらに説得工作の成否は現地に対する利益還元にかかっており、その点を京大にも理解してほしい。

雲南側は車がすでに一台しか残っておらず、車の提供を期待する。

雲南側からも登山隊員を派遣したい。登頂できなくとも育成したい。協力員としてシエルパの雇用は考えていない。協力員も雲南で考えたい。

(3) 京大

京大の最大の問題は経費の問題をいかにクリアするかであり、現状の日本経済のもとではこれまでのような資金が得られないことを強調した。

(三) その他の重要事項

(1) マスコミ問題 地元マスコミの取材・同行の可能性もあると思われる。

雲南省側ではマスコミ同行に慎重な態度。かなり取材の制約を受けるだろう。

(2) 自動車問題

(3) 高所協力員の問題

雲南側は地元調達を主張(地元利益)、チベット登山協会は二〇〇〇年までに八〇〇〇メートル全山登頂計画があり、チベット人協力員も動きにくい。地元協力員(低所) + チベット協力員(高所)の組み合わせまたはシエルパの雇用も考えたい。

二、備忘録調印団の派遣

(96. 3. 8—13)

日本側… 木村雅昭(ヒマラヤ委員会委員長)、

斎藤惇生、松林公蔵、倉智清司
ほか一名

中国側…ほぼ前回と同じ

(一) 二月の事前協議事項が了承された。ただ高所協力員については未定、また種々の経費分担、車の台数などがきめられた。

(二) 組織

総隊長 日中各一名(日：斉藤(66))

総括隊長 同右 (日：松林(45))

(登攀と報道全般を統括)

秘書長 同右 (日：倉知(46))

海外の山の計画

チンボラン

酒井敏明

エクアドルの最高峰(Chimborazo)六三二〇メートルは、南米の科学的探検の先駆者フンボルトが一八〇二年登攀を試み、一八八〇年、かのウインパーが初登頂したという、由緒正しい山である。また、真の球形ではなく、赤道半径が極半径より約二十一キロ長いわが地球においては、南緯一度半に位置するこの山の頂上は、北緯二十八度のチヨモランマの頂上よりも地球の中心からは遠い。いわば世界最遠峰の名譽に輝く山である。

九十三年夏、私は仲間たちと呼びかけて、一行十三人でキリマンジャロに出かけ、首尾よくアフリカ最高点を踏むことができた。これに味をしめ、

登攀隊長 日本側一名(人見(40))
登山隊員 日七名(気象一を含む)

中未定

以上のような経過をたどり、梅里雪山計画は本年十一月から十二月にかけて実現の運びになる予定であります。すでに隊員の公募も行っており、準備を進めております。次号では隊員の紹介などをする予定です。今後会員の皆様のご協力をお願いいたします。

(文責 平井一正)

ことしはの八月二十一日出発、現地十日間くらいの手定で、チンボランの登頂を試みる構想を練り、すでに一部の仲間へ声をかけている。

空路出発、マイアミ経由で海拔二八五〇メートル、アンデスの高地都市エクアドルの首都キトに着く。到着後、近くの適当な山で足慣らしをしてから、最遠峰にとりつきたい。調子がよほどよければ、Cotopaxi 五八九七メートルを狙うことも考えられるが、もつと低い山で高度順応をするべきかもしれない。

パン・アメリカン・ハイウェイを南下、リオ・バンバ市の西方にこの山は聳える。登路は、最も容易とされる南西側から登るウインパルルート、ロッジから頂上まで登り八〜十時間、下り三〜四時間かかるという。傾斜五〇度の氷雪のガリーを登行する箇所もあるので、キリマンジャロとは異なり、ピッケルとアイゼン(十二本爪)が必要であるらしい。きついのはこの一日だけであろう。

一、二の旅行会社がツアーを売り出しているが、

費用が六十二万円前後で、期日もきまっているのが面白くない。キリマンジャロでお世話になったアルパインツアーサービスの紹介で、二月末にエクアドルのガイド会社に照会の手紙を書き、経費などを尋ねていたが、最近やっと返信を手にした。人数にもよるが、キト空港に到着してのち、登山をすませてアディオスを告げるまで、一人当たり、八〇〇ドルで引き受けるという。航空運賃はこれからしらべるのだが、費用はすべてをひつくるため、四十〜四十五万円程度におさまるのではないかと期待している。

もちろんAACK会員のなかには、永田龍さんのように、すでにチンボランに登った人がいるわけだが、この機会にエクアドル・アンデスまで足を伸ばそうと考える同好の士を募る。キリマンジャロには会員十人と、そのうち三人の伴侶が同行されたが、もちろん今回もご家族で参加されるのは大歓迎である。望むらくは、体力に余裕綽々という若い世代の参加があれば、こんなに心強いことはない。登山隊としての作戦が立て易くなるからである。また、山は麓から仰ぎ見るだけで充分とお考えの向きには、アンデスの風土とインディオの文化にふれるプログラムを組むことができるはずである。

もつとも、こんなことを書いている私自身がすでに老兵といつてよい年頃なのだから、最終のロッジから手を振って見送る側にまわりそうな、悪い予感もするのだけれど。

参加しようという人を熱烈に歓迎する。なるべく早く郵便またはファックスで連絡してください。

(FAX: 〇七五・五九三・七九三七)

最近の南極から

—ドームふじ観測拠点など—

横山宏太郎

第三十五次南極地域観測隊に越冬隊長として参加し、一九九四年二月一日からの一年間、昭和基地で四〇名で越冬し、一九九五年三月二十八日全員無事帰国しました。私にとっては十四次越冬以来久しぶりの南極でした。

現在南極では「氷床ドーム深層掘削観測計画」が進められています。これは昭和基地から一〇〇キロメートル内陸、標高三八〇〇メートル、最低気温は氷点下九〇度にもなろうかという「ドームふじ」で、二五〇〇メートルまでの氷床深層掘削を行って過去二〇万年の地球環境の変化を探ろうというものです。三十五次はその第三年次にあたり、ドームふじまで大量の物資輸送を行い、観測拠点を完成しました。内陸旅行は、途中六五〇キロメートルの中継拠点までの秋、春の旅行、夏のドーム旅行と三回実施しました。秋、春の旅行は、気温氷点下六〇度以下の日が何日も続くたいへん厳しいものでした。夏のドームF旅行は期間四カ月、総勢十七人が参加するという大規模なものになりました。私も往路の先発隊に入り一九九四年十月十一日に出発、十二月三日昭和基地に戻りました。十月三十一日ドーム到着前夜には気温氷点下六七、五度が観測されました。

基地の建設は十一月下旬に始まり、低温・低酸素の環境での作業ですから大変な苦勞がありました。雪上建物と雪洞部分を合わせて約五〇〇平方メートルの基地を無事完成し、一九九五年二月一日から九人の三十六次隊により越冬が開始されました。ドームFで建設にあたった九人の隊員がしらせに戻ったのは二月十三日でした。

南極観測には西堀第一次越冬隊長を初めとして多くの会員が参加、活躍しておられます。私も、次の三十六次隊の観測隊長上田 豊・夏隊員山岸久雄のお二人を昭和基地で迎えることができました。しかし、ドームふじでの地上最低気温の観測を楽しみに、ドーム最初の越冬リーダーとなるはずだった井上治郎さんの姿がなかったのは、まことに残念というほかありません。

三十六次隊からの連絡では、ドームふじ観測拠点はたいへん快適な基地だったとのことで、越冬も無事経過し、作った側としては一安心というところ。深層掘削は六〇〇メートルを越えて三十七次隊に引き継がれ順調に進んでおり、成果が期待されます。なお山岸さんはこの秋出発する三十八次隊で夏隊長をつとめられます。

第二回野生医学世界会議報告

中島道郎

野生医学 (wilderness Medicine) と聞いて、そんな医学があるのか? と驚かれる人は多いと思います。私が最初に登山医学ということを出した時、そんなら海洋医学もあるのか? と質問した

人がありましたが、あるのですよ。潜水障害に関する研究は昔からありましたし、クラゲやオコゼの毒、サメ咬傷などの対策に関する研究もあります。このように、山岳・海洋ほか、河川、森林、沙漠などにおける野外活動に関し、予想し得る身体的危険の知識と予防・対策全般にわたる医学、それが野生医学です、その場合、登山医学はスポーツ医学であると同時に野生医学でもある、と言われますが、その意味は、記録ないし健康増進を対象にした医学はスポーツ医学、野外での遊びを対象にして医学は野生医学と理解すれば、登山医学はその両面を有することがわかりでしょう。その中で登山は野外活動の主役であり、したがって、登山医学は野生医学の中心です。例えば、キャンプ生活、猛獣・毒蛇・毒虫・毒草や水などの野生環境、食糧・衣服・野外生活用具等々に関する医学知識は、そのまますべての野外活動に応用されます。

この野生医学の世界会議は、第一回がカナダのウイスラーで一九九一年に、第二回がコロラド州アスペンで昨年(一九九五)八月にあり、共に参加しました。アスペンは海拔二四〇〇メートルの、以前冬期オリンピックも開催されたことのあるリゾート地です。この会議の特徴は、オリジナルな研究発表はすくなく、ほとんどが教育風講演で、聞いたらすぐに参考になる事柄が少なくありません。その受け売りを二、三、以下に紹介しましょう。

野外の水の消毒法…煮沸法、濾過法、塩素法の三法があるが、何れも一長一短で単独ベストという方法はない。煮沸法は滅菌という意味ではべ

ストであるが、面倒だし、水はきれいにならない。濾過法は水はきれいになるが、装置が要り、時間もかかる。塩素法は簡便であるが、これで殺せない病原体もあり、匂いと味が問題である。結局濾紙程度のもので水をおろす程度きれいにして、という二重処理が望ましい、ということである。濾過装置を内蔵したストローが市販されているが、あまりお勧めとはいえないようだ。次亜塩素酸カリ液は山道具店にあり、入手も使用方法も簡単だが、作用時間を十五分以上置くことが大切である。そうすれば、滅菌効果もかなり高く、塩素もかなり抜ける。

低体温症患者の治療… 風呂にいたらよいという知識は、観念として誰もが持っているが、実行は困難である。患者の体を不用意に扱うと『心臓粗動』が起こって心停止をきたす危険がある。その辺の山小屋程度の設備でできる処置ではない。たき火では体が均等に暖まらない。懐炉も誰もかと思いつくが、今の懐炉はすべて『モミモミ懐炉』であり、その熱総量は極めて小さく、登山に持参する程度の量で低体温の治療はできない。健者が裸でジカに暖める方法は可能性としてはあるが、言うべくして実行は困難である。結局最寄りの大病院にへりて搬送するのが一番の良策である。

ま、こういった話しを現役の医学部教授たちが自己の体験を踏まえて講義するので、実に感動的です。遊びと学問の融合。これこそわがAACKの世界そのものではないか！としみじみ思いましたね。

AACK 会員動向 (過去五年間)

新入会員 (括弧内は紹介者と主な国外山歴)

1991年	陸好正治	1990年、京大・農・林学卒	立命館大学勤務 (能田、吹田、コンロン)
1992年	遠藤京子	1962年、京都工織・繊維・繊維化学卒	学習塾経営 (斎藤博、遠藤克、マナスル、ボゴタ、チャンラ、マッキンリー、ゲニ峰など)
	杉江知治	1987年、京大・医卒	京都大学付属病院勤務 (斎藤博、遠藤克、シシャバンマ、ネパール)
	利岡徹馬	1983年、京大・理・地球物理卒	応用地質(株)勤務 (伊藤宏、吹田、梅里雪山捜索調査隊)
1993年	中村 真	1991年、慶應大・理工・物理卒	京大化学研究所大学院在学 (伊藤宏、吹田、マッキンリー)
	福沢卓也	1988年、北大・理卒	北海道大学低温化学研究所 (中島暢、横山、バタゴニア北氷床、ヒンズクシュ) (94年9月ミニヤコンガで遭難死亡)
	前田浩之	1991年、京大・理・地質卒	(株)数理計画勤務 (伊藤宏、吹田)
	安成哲三	1971年、京大・理卒	筑波大学地球科学系勤務 (高村、横山、バタゴニア、ネパール、チベットなど)
1994年	小林尚礼	1993年、京大・工・衛生卒	京大工学部大学院在学 (陸好、吹田)
	松野昌展	1993年、日大松戸・歯卒	日大大学院歯学部在学 (松沢、高井、バミール学術調査隊)
1995年	吉村千春	1982年、駒沢大・経営卒	(有)アナヴァン勤務 (斎藤博、陸好、コルジュネフスカ峰、マッキンリーなど)
1996年	辻 一郎	1955年、京大・法卒	毎日EVRシステム勤務 (平井一、斎藤博)

退会者

1990年	川崎泰生	白沢あずみ
1992年	川村俊蔵、末包慶太、川合明宣	

物故者 (括弧内は死亡年)

今西錦司 (92)	前田敏男 (91)	井上治郎 (91)	井上鐘明 (91)	石野琢二郎 (94)
今西寿雄 (95)	上林 明 (92)	兼松雄兼 (93)	熊谷太三郎 (92)	工業英司 (93)
工藤俊二 (91)	近藤浩史 (91)	児玉裕介 (91)	小金井正巳 (94)	米谷佳晃 (91)
佐々木哲男 (91)	笹倉俊一 (91)	清水久信 (91)	杉山佐一 (95)	杉田豊三 (94)
杉本半三郎 (94)	田村孝夫 (94)	田中清助 (95)	立平宣雄 (94)	中尾佐助 (93)
西浦新一郎 (93)	西岡京治 (92)	長谷川喜代三 (94)	広瀬 顕 (91)	福沢卓也 (94)
船原尚武 (91)	堀龍 雄 (92)	宗森行生 (91)	陸田菊太郎 (93)	本野亮一 (93)
山本 保 (93)	和崎洋一 (92)			

AACK人物抄

高橋健治さん

—その1—

斎藤清明

ローゼ・レッセさんを、横浜のご自宅に訪ねた。もう九十歳にも手が届きそうになったとか。最近、身辺の整理をされていると電話でうかがったので、気になっていた。

ローゼさんは、AACK創立メンバーであり笹ヶ峰ヒュッテの主、故・高橋健治さんの夫人である。今西錦司、西堀栄三郎さんとともに「三高山岳部の三羽がらす」と評されたという大先輩だが、戦後すぐに亡くなられており、その名を知る人が少なくなった。今のうちにローゼさんに聞いておかねばと思ったのだが、高橋さんのことは、AACK五十年史（一九八八年、中央公論社刊）『ヒマラヤへの道』執筆のころから気になっていた。たいへんなクライマーであり、またスキーヤーとしてもわが国の先駆者だったのに、その業績は余り残されていない。AACKとして、ぜひ記録しておかねばならない先輩だと。

わたしも少し手をつけているが、その略歴、山歴などをざっと紹介しておこう。

明治三十六年（一九〇三）、上京区堀川中立売東入の裕福な古木商（この業種名はもう聞くこともなくなったが、今日でいえば建築業になろう）の二男に生まれた。母は黒住教の開祖の孫にあたる名門だった。大きな家で、のちに敷地内に自分の山小屋を建ててもらい、山仲間に開放していたそうだ。

府立三中（今西、西堀、桑原武夫さんは一中だった）を経て、大正二年（一九一三）、三高に入学。翌年の新学期とともに発足した山岳部で活躍する。京都帝国大農学部には大正一四年（一九二五）入学する。病氣静養の時期もあつて卒業は遅れて昭和五年（一九三〇）になったが、旅行部でも中心メンバーだった。

この間、剣岳の岩登りに情熱を傾け、初登攀としてはチンネがある。高橋さんをトップに、今西、西堀さんという最強トリオでザイルを組んだ。積雪期の剣岳の開拓にも務めている。また、北岳バットレスの初登攀も行った。その一方で、スキー山行も盛んに行っている。

旅行部にクラブ・ヒュッテを作る計画がおこると、古木商の家業もあつたのか、奔走した。笹ヶ峰ヒュッテの名義が高橋になっていたので、その働きから当然のことだったのだろう。高橋さんが亡くなった後、ローゼさん名義になる。京都大学に移管されるのは、戦後かなり経ってからのことである。

関西学生山岳連盟の設立（一九二九年）にも高橋さんは大いに貢献した。楽友会館に京阪神十校の代表が集まつたの結成の際、趣旨・経過報告をしたのは高橋さんだった。

京大卒業と同時に、植物学研究のために渡欧する。ミュンヘンに居を構え、植物園で勉強のかたわら、というより、登山とスキーに打ち込んだ。その山行などは、いずれ調べたいと思っているが、本場から京都の友人たちへの手紙が、AACK創立への刺激になったにちがいない。

帰国（一九三二年）すると、既に活動を開始していたAACKの総務となる。しかし、最初のヒマラヤ計画が挫折し、今西、西堀さんとカラフト落ちを共にする。その後、白頭山遠征にも参加するが、健康がすぐれなかったこともあり、次第に登山からは遠ざかったようだ。

それよりも、オーストリアから持ち帰ったアイベルグ・スキー術の講師としてスキー界では有名になる。長身を駆使し、まるで芸術品だったと私も聞かされた。後輩やあちこちから、コーチに招かれると労をいとわなかったそうだ。スキー術の著書もある。

学問では、「日本の森林限界」の学位論文を著し、植物生態学の先駆的な研究を行ったそうだ。また、ローゼ夫人とともに民俗採集の旅を続けられた。しかし、長い療養生活を送られた後、昭和二二年（一九四七）に死去する。戦後間もない、困窮の時期だったという。

その業績なども発掘していきたいと思つていますが、「もう歳だからね。八八歳になったのよ。私が亡くなると、健治さんの資料もなにもかも、燃やされてしまうからね」とのローゼさんの言葉に、せつかれる思いになった。

峰ヶ笹の ヒュッテの 現状

岩坪五郎

昨年四月より左右田健次さんの後を受けて小生、山岳部長をつとめております。定年退官まで二年たらずの老輩が山岳部長を押しつけられましたのは、ひとえに笹ヶ峰ヒュッテ改築への努力が期待されていることにあります。皆様のご指導、ご支援、ご鞭撻を賜りたく、お願い申し上げます。まず、これまでのヒュッテの修理の状況などについて述べます。

修理等の歴史

昭和二十三年…京都大学山岳部は笹ヶ峰ヒュッテに修理を加え、学内に開放し、その宿泊費を貯蓄して維持・管理費の一部とした。修理費の出所は不明。

昭和二十七年…笹ヶ峰ヒュッテは高橋健治氏のローゼ夫人の名義で新潟県杉野沢村に登録されていたが、木原均京都大学学士山岳会会長より京都大学に寄贈された。

昭和三十一年秋…主として床下回り(床下柱、根太(ネダ)の補修。畳の張り替え、窓枠修理等を学生部より修理費約五万円をもらって行っ

た。

昭和四十年…三十九年夏、柱がゆがんで二階の根太がはずれ落ち、宿泊者が外部に避難する事態がおこった。これに対し、昭和四十年八月二十五日から十月十四日にかけて学生部により総費用七十五万円の修復工事が行われた。施設部指定工事業項によれば、補強工事及び建物歪み直し、在来便所及び部員室の一部取り除き、便所の新設、炊事場の模様替え、薪小屋の模様替え、窓新設取付け、破損建具の補修、給水工事である。このとき補強工事として十ヶ所の控え柱が敷設された。また、山岳部はOBより寄付を募り、二三七、七〇〇円でもって、屋根葺き替え、畳入れ換え、ストープ入れ換え、寝袋購入等を行った。工事前の調査より、薪置き場、便所など付属建物への積雪により、主建造物に歪みが生じていることが判明した。

土地貸借関係について…土地は妙高高原町所有。借用地…ヒュッテ建坪を含め三〇〇坪。借期間…昭和三十九年七月一日より四十九年六月三〇日。借入金…無償(但し協力金として年四千元妙高高原町に支払う)。

昭和五十三年…東側屋根、下半分の大部分が雪によりはずれてしまった。学生部により入札が行われ杉野沢竹内工務店が八〇万円弱で請け負った。

平成七年…入り口小屋根の修理、煙突修理、外側にある炊事用流しの修理。修理費十八万円。山岳部より支出。

平成七年九月、工学部建築学教室の助手で一般建築士の吹田啓一郎君と調査を行いました。以下、

その報告です。

笹ヶ峰ヒュッテの現状の問題点

(吹田啓一郎)

(1) 基礎および土台

土台や一階床下躯体の腐朽は他の部位よりも早く進むことがこれまでの修理歴からうかがえる。その理由は床下の湿潤によるもので、周辺が豪雪地帯でありまた豊かな植生であることから、地表面近くが湿潤な環境におかれることは避けがたく、特別な対策を要する。現在も東西外壁下の土台をはじめとする基礎上の木材に腐朽が著しく、これを放置すれば倒壊などの危険性は高い。

(2) 耐雪性

積雪により建物に作用する荷重は、屋根に直接作用する鉛直荷重、基礎から一階外壁側面に作用する側圧、屋根上の積雪と地盤上の積雪が一体化し、その後の積雪の沈降に伴って屋根や軒先に作用する圧縮力、などである。現状では地表面から軒先までの距離が充分に長くとられていないため、豪雪時に地盤上から屋根上まで積雪が一体化することは避けがたく、屋根や軒先の損傷が発生しやすい。

躯体についても、長年のこれらの積雪に伴う荷重による建物の劣化は避けがたく、昭和四十年の修理で東西および南面外壁に沿って十ヶ所の控え柱が追加されて、現在まで持ちこたえている。しかし、この控え柱の存在は建物外周部に冬季の季節風を巻き込み、控え柱設置以前に増して雪の吹き溜まりを建物周辺に作りやすくする原因となっており、積雪の沈降に伴う荷重による被害を受けや

すいという矛盾をかかえている。

過去十年あまりの間に積雪の多い冬を越す毎に建物全体の傾斜が見られるが、さいわい、年毎に異なる方向へ傾いており、これまでは特定の方向への傾斜が累積して倒壊へと結びつく心配はなかった。しかし、いずれの方向へ傾くかはそのときの積雪状況、融雪状況により左右されるもので、いつ危険な状態になるか予断を許さない状態である。

このための対策としては控え柱に依らず躯体の強度を高める補強が望まれるが、もともと開口部が随所に設けられていて筋かいなどの補強を入れにくい平面計画の建物である。現状のままでは幾度も躯体を補修しない限り恒久的な使用は望めず、抜本的に構造計画からの見直しが必要である。

(3) 床面積の不足

厨房・暖房用薪小屋の増設、別棟便所の設置などにより必要な面積を確保するための努力を行っているが、絶対的な収納スペースの不足などの建築計画上の問題がある。現状は宿泊施設としての利用を目的に計画されており、例えば自然と直にふれる野外教育の基地施設としての機能は特に考慮されておらず、資料保管や機器設置に必要な空間が十分に確保できない。

(4) 設備関係の不備

電気設備、通信設備などが完備されておらず、これまでは夜間の照明は灯油ランプに頼り、緊急時の通信手段が確保されていない状態で、かねてから火災の危険性、緊急時の対応などに問題が指摘されてきている。また生活用水の供給設備が簡易な構造であるため豪雪・豪雨などの影響で断水

することがある。

以上

山岳部長としての私の考え

「このままほっておくわけにはいかん。そのうちつぶれてしまう。なんとかしなければ。」に尽きます。

現在考えている改築案は次のようなものです。国立公園の中にあるから、外観は現状を保つ必要がある。屋根と地面の距離を上げるために鉄筋コンクリートでかさ上げし、三階建てのようにする。炊事場や薪小屋のような出っ張りをなくして一体化する。バットレスはなくす。などが基本構想となるでしょう。

学生部と相談を始めていますが、全額出してもらせる可能性はまったくありません。アメリカンフットボール部は数億円を募金して合宿所をつくったようです。改築案が固まってきましたら、皆様にご支援のお願いをする予定です。どうかよろしくお願い申し上げます。

書評

平井一正著

「初登頂—花嫁の峰から天帝の峰へ—」

しあわせな登山

広瀬幸治

平井一正著「初登頂—花嫁の峰から天帝の峰へ—」が出版された。看板に偽りなく、著者平井

の四回のヒマラヤ遠征は、すべて、いづれ劣らぬ四つの秀峰（チヨゴリサ（七六五四メートル）、サルトロカンリ（七七四二メートル）、シエルピカンリ（七三八〇メートル）、クーラカンリ（七五五四メートル））の初登頂に成功し、事故一つなく、若手登頂要員から総隊長まで、年齢に応じてそれぞれの役割を果たし、その後後に京大山岳部の入門コースを還暦後の神戸大学の後輩との交流があつて、みごと山登り人生というほかはない。まずは敬意を表したい。これだけの山歴にはよほどの幸運が必要であるが、それをたぐりよせた情熱と人徳に、あらためて感じ入った。

たとえば、シエルピカンリのルート選択は、あれは多分ここしかない成功の可能性がないという、追い込まれた消去法の決断だったと思うが、自分は幸運の星のもとに生まれた、と自己暗示にかけ、隊員までその暗示にかかってしまった、ということだろう。文句をいう隊員もいるが、この隊長ではケンカのしがいもない。しあわせな登山である。

平井はその性格が素直で、全く屈折したところがない。山が相手ならそれでいいが、ヒマラヤはひとりでは登れない。一九五〇年代の京大山岳部から、彼のさわやかな人間関係がはじまり、それがどんどんひろがってゆくのは読んでいて気持ちがいい。友人に対する尊敬や思いやりが、いたるところで文章からにじみ出ているのは、この本の魅力のひとつであり、また彼の成功の理由でもある。

ふだんはなにかと文句の多い私であるが、読み

始めるとだんだんこちらも素直な気持ちになつて、最後まで一気に読まされてしまった、というのが私の読後感である。

ナカニシヤ出版、三五八ページ、写真多数、
二九〇〇円。

書店になければ、直接出版社
(電話〇七五七五・二二二二)
に注文のこと

私の体験

年寄り

高山病に氣をつけろ

北村泰一

はじめに

近々斎藤惇氏が梅里雪山へ、寺本巖氏がバプアの五〇〇メートルへゆくと書いた。どうか彼らが自分とおなじ病に倒れないようにとの思いで私の体験を書く。

一九九四年の夏、九大中共同ココシリ探検隊(日本人十三名、総勢三十五名)の一員として、コンロン山脈の南側、ココシリ(五〇〇〇メートルの高原)へ行った。コンロンの地は学生時代からの憧れの地であったが、卒業時に自分を『水平組』と定義し、南極、北極、アラスカ、アフリカ、

ブラジル、ペルー、パラオなど、いわゆる未開発国の奥地へわけ入った。しかし、ついで『高さ』を追求したことはなかった。

蘭州(高度一五〇〇メートル)から、武威、張掖、酒泉、嘉峪関、敦煌(二五〇〇メートル)へと、河西回廊をバスで暫時高度を上げ、そこから、グルム(三〇〇〇メートル)へ、グルムからジープで青蔵公路を走り、コンロン峠(四五〇〇メートル)を経て、すこし先からココシリへの道なき道をわけ入った。

探検隊の目的は、未踏地の諸々の学術調査と、その地域の六五〇〇メートルの嶺の初登攀であった。私は、そのベースキャンプ(五〇〇〇メートル)で、不覚にも人事不省に陥った。酸素不足(通常の五〇%)が原因らしい。

その少し前

その前からおかしいと思っていた。おいしい筈の中華料理が思うようにノドを通らなかつた。嘉峪関あたりで風邪を引いたのであるうか。毎日が猛烈な咳込みで、その都度、胸に響いて痛くなる程の日々が続いた。その上、下痢も続いた。そんなことはついで経験がなかつたので、氣にもとめていなかった。南極では、不眠不休で三十六時間も重労働(建設)をしたし、アラスカでは、五〇〇〇メートルを越す高さをピンピンしていた思いがあるからだ。その時、それから三〇年の月日が流れていることをすっかり忘れていた。

水は余り飲まなかつた。小便は出なかつたが顔はムクんでいなかった。高原に登つてからは、何かモノウイ氣がして、日記がつけられなかつた。

会務報告

臨時理事会 (一九九六年二月一日(日)、

一八時～二二時、京大会館)

出席.. 高村会長、酒井、木村両副会長、伊藤、岩坪、上尾、斎藤、吹田、竹田、西山、松林各理事

委任.. 岩瀬、牛田、左右田、田中、能田、森本、横山

議事.. 梅里雪山登山隊の派遣について

定例理事会 (一九九六年三月二〇日(水)、

一三時～一五時、京大会館)

出席.. 高村会長、酒井、木村両副会長、伊藤、岩坪、上尾、牛田、斎藤、吹田、左右田、西山、能田、人見、福崎、松沢、松林、陸好

委任.. 岩瀬、田中、森本

議事.. 一、一九九六年度事業計画・予算について

二、遠征基金の運用について

三、新入会員について

ヒマラヤ委員会 (一九九六年一月二四日(水)、

一八時～二二時、京大会館)

出席.. 高村会長、上尾、木村、小林、斎藤、酒井、吹田、左右田、西山、能田、人見、平井、福崎、松林、陸好、山口、

議事.. 中国への交渉団派遣について

ヒマラヤ委員会 (一九九六年三月二〇日(水)、

一五時半～一七時、京大会館)

出席.. 木村委員長、上田、新井、伊藤、岩坪、上尾、牛田、小林、斎藤、酒井、阪本、吹田、左右田、高井、高村、中島、中村、中山、西山、人見、平井、福崎、松沢、松林、陸好、吉村

議事.. 対中交渉の経過報告その他

(酒井敏明)

コシリのベースキャンプについたある日、観測テントから二〇メートル先の自分のテントに戻るのに、どうしても足が前に進まなかった。『おかしい』、と思いつつ、その時は、這って自分のテントに入ったことを最後に氣を失ってしまった(八月十七日)。中国側が提供する酸素(ゴム枕に大型酸素ボンベから酸素を満たす)を吸った。登山隊が、小型酸素器具を持ち出していたからだ。テントで寝ていた四日間は殆ど絶食状態で、言語は意味不明の状態だった。ブドウ糖を飲まそうとしたらしいが、胃がそれを受け付けなかった。水のみを飲んでた。大は勿論、小も一人では出来なかった。

入院

とにかく、七〇〇キロメートル彼方のゴルムの病院へ移そうということになった。その四日間のジープによる旅は辛かった。

ゴルムには、人民解放軍二十二二院という軍病院が唯一の病院であった。軍服に金の肩章をつけたいかめしい軍医が主治医だった。看護婦さんはいなかった。しかし、日本人だからというのか、学校出立での、赤ベタの軍服を着た若い女医さんが、特別に食事をさせてくれたりした。

症状

病院では、『高山適応不全』と診断された。要するに『高山病』らしい。具体的には『高血圧(二八〇/一二〇)』『糖尿』と判定された。自分は今まで低血圧(九〇/六〇)で、糖尿とはとんでもない、若い時から大食い・早食い・早グソが

特技である、と抗議した(勿論通じない)。しかし、一人では立ち上がれなかった。

便所へゆくのに一番困った。一人では立てなかったからだ。女医さんには頼めず、看護婦さんも居なかった。便所は一〇メートルくらいのところにあつたが、廊下の壁を、精一杯の力を出して伝つて歩いた。しかし、便所は反対側にある。どこかで渡らなくてはならない。幅三メートルくらいだが、そこを渡るのがひと苦労だった。コンクリートの床は凸凹で、いつも掃除の水がたまっていた。エイヤツとわたるが、その時いつも、昔、黒部の激流を流されずに渡つたことを思い出していた。

ゴルムの軍病院には五日間、そこで点滴をうけた。食事は余りノドを通らなかつたが、可愛い女医さんに食べさせて欲しいばかりに、無理をして食べた。

二日間のつらい蘭州までのジープの旅(二〇五〇キロメートル)、蘭州のホテル三泊、汽車一泊、北京二泊の後、福岡へ帰つた。倒れてからゴルムの病院まで八日間(七〇〇キロメートル)(八月二十五日)、蘭州(二五〇〇メートル)まで十三日間(一七五〇キロメートル)(八月三十一日)。日本まで十八日間(九月五日)経っていた。そのまま九大病院へ四〇日間入院した。病院では、脳波検査はもちろん、脳のMRI、放射物質検査などあらゆる検査を受けた。『構音障害』『四肢失調』と診断された。カロリーは一八〇〇キロカロリーに制限された。言語障害は小脳がイカれていることからきているらしい。軽い脳梗塞だと診断された。体重は、入院時六〇キロ(健康時七十五キロ)

退院時六十四キロだった(現在七〇キロ)。声は裏声で、平常よりオクターブ高い。意味不明だったらしい。当初は一人で立てなかつたが、夜、看護婦さんの目を盗んで、こっそりと禁止されている見舞いの果物などを食べてから立てるようになった。

現状

現在(退院より一年半)、言語はお不自由である。頭の中からは喋るべきモノが出終わっているのだが、口はまだ喋り終へていない。丁度、CPUは早い、プリンターがおそく、途中のバッファに全部ストアーされてボチボチ打ち出す旧式のコンピュータのようだ。だが、退院時オクターブ高かつた声のトーンは、この一ヶ月で、意味を聞き取れる程に劇的に下がつたという話である。現在、電話で内容が判断出来る程度だ。しかし、町へ出ると、人々は精神薄弱ジジイと思うらしい、途中からバカ丁寧な説明になったりする。そんな時は、こちらも、フンフンとそんな振りをするとなかなか面白い。

言語以外は正常だ。血圧は一二〇/七〇。少しフラフラする。糖尿は境界ストレスだ。唾がすぐに気道に入るのでせき込みがひどい。特に、人から話しかけられてすぐに返事をせねばならない時、燕みこむ唾は気道に入り易くせき込んでしまう。

スキーは出来るが、岩のほりは出来ない。失調性と言われる由縁だ。梯子は注意して登り降りする。走るとき、ある速度をこえると体が浮くような気がする。

対策

(一) 自分が年寄りであることを自覚する。
・肉体的…自分は六十三才であることを自覚せず、現役の山岳部新人と同じように水汲みその他働いた。日中は、若者が車の中でグーグー昼寝をしている間、一睡もせず景色や地形を観察していた。

・精神的(余り仕事を持ち込まない)…自分は本業に二つのテーマがあり、重い観測機器を二種類、副業に二つのテーマ、荷物は人の三倍以上あった。携帯用コンピュータまで持ち込んだ。仕事の多さが、若い人が寝ている間にも、仕事をせねばならないはめに陥らしめた。

こうして、私は、探検行動中、精神的にも肉体的にも緊張状態にあった。

(二) 行動中は、水分をよくとれ。

・血の粘性を下げるべく、水分をよくとること。
・小便を恐れるな。要するに血が濃くなるのを防ぐ。(自分はジープで日中の移動中は一度も小便に行かなかった)。

(三) それでも病に倒れたら、どうするか。

・何をおいても、早急に下界に移動すること。これに尽きる(血流不全のまま、脳が腐らない前に)。私は、倒れた地点(五〇〇メートル)で四日間寝ていた。そして、ゴルムの病院(三〇〇メートル)まで(七〇〇キロメートル)四日かかった。つまり、酸素欠乏の中で八日間いたことになる。その間に、脳に血液が回らないので(酸素不足?)小脳が腐つたらしい。

私がこうなったのは、隊がこのことを知らなかった故もあるが、そうおいそれと下界に降りられ

るような処でもなかった。言い方によっては、五〇〇メートルで八日間いても、この程度だという例にはなる。個々の差は大きいだろうが。
・食べること。体力保全に務める。その為には食べなくてはならない。ベビーフード(緊急用)などをもつてゆく。
近くの名の中国青年は死んだ。

以上

(この欄は、会員の貴重な体験を報告して頂き、他の会員の今後の参考にしていただきたくためのものです。会員の中で、貴重な体験をお持ちの方がありましたら、ぜひご連絡下さい。―編集者)

言いたい放題

AACKの 黄昏に思う

本多勝一

「言いたい放題」の原稿を平井一正氏から再三せかされながら、どうもペンが重くて書きだせなかつたのは、基本的にもうあまり書くことがないからだと思えます。そう思つて、もう三〇年以上前に「AACK時報」第四号に書いた「AACK

CK解散論」を読んでもみました。その中に次のような言葉があります。

本誌第三号の座談会「サルトロ・カンリ遠征をめぐって」は、これら三者が入り乱れての発言でなかなか興味深く思った。「興味深い」というのは、それぞれの発言が立場を異にするため、議論が噛み合わない現象をおこしているからであつて、べつに感心したというのではない。ついだが、あの中に次の目標の候補地がいろいろ出てくる。しかしAACKの伝統をしのばせるのは、「ヤルカンドの彼方」(加藤説)と「南極の最高峰」(梅棹説)の二つに尽きる。共産圏がいつまでもむずかしいかどうかは、とくに最近の国際情勢を考えると、油断できないと思う。南極を着実に計画し、一方では共産圏(といつても中国)にいつでも出られる準備をし、かつ働きかけることくらいが、AACKの解散記念事業といふべきか。

これ以後に「南極最高峰」はアメリカ隊に登られてしまったし、共産圏には他のグループが続々はいり始めました。AACKの中国入りは決して「先陣を切つた」とは言えませう。

非常にくやしかつたのは、コンロンの最高峰を東京農大隊にやられてしまった点です。あの隊長は私個人としてはよく知つていて大いに尊敬できる人物でしたが(のちに日本の山で遭難死)、AACK会員としては「何たることか」と思いました。旧制三高の歌にも出てくる夢のコンロン、それさえも指をくわえて見ていただけか。この「パ

イオニア精神」の欠如ぶり。

ただ梅里雪山があのようになつてしまつた今、あまり無責任な「言いたい放題」は気がひけます。A A C Kの黄昏の光芒としても、やはりできれば初登頂の雪辱を果たしてほしい。とはいつても「処女峰の落ち穂拾い」にしては危険が多すぎるらしいこの山で、若者の命をこれ以上絶対的に失わせないでほしい、そんな矛盾した思いに乱れています。梅里雪山で遭難した京大隊のうち、探検部O Bの広瀬頭君の追悼文集が去年刊行され、私も駄文を寄せました。その最後の部分を以下に引用して、今の気持ちの一端をお伝えします。

*

そして、生年月日を見て重ねて驚かされた。広瀬君は私の次男と同じ年、工藤君は長女と同じ年に生まれている。ああ、二人は私の子どもと全く同じ年齢の若者だったのだ。人生の旅立ち、その自立の街角にでたばかりの子どもたちが、希望に満ちたその輝きのただ中で、突如として消えて、いや消されてしまった。この一文を書きながらも消された二人、一度も言葉をかわしたことなくさえたかった二人の姿が、自分の子どもたちの顔をダブツてみえる。悲しみよりも、当人たちの口惜しさ・無念さはどんなだったであろうか。さらにご両親の気持ちにはどんなだろうか。自分の子どもが遭難した八ヶ岳に毎年登り続ける親。冬の薬師岳で遭難した十三人のうち、春の雪どけを待っても遺体が見つからなかった二人を、晩秋まで探しつづけてついに見つけ、白骨の息子と対面した親。そのほか多くの例を見てきた者としては、そんな親たち

におくるべき慰めの言葉など、ひとつもない。古典や教典を引用したり冥福を祈ったりすることさえ偽善にみえる。子どもらは行きたくて行つた。真の冒険とは、本来こういうものだ。逝きたくて逝つたともいえようか。わが青春も死と紙一重のことが何度もあつた。当人にとっては「死などないのだ。ただ俺だけが死んでゆくのだ」といった言葉も、想えば学生のころパキスタンに行く貨物船の中で読んだマルロオの本にあつた。親たちは、ただ耐えるしかない。悲しみは死ぬまで癒されることはないが、せめて理解してやつてほしい。息子が何をめざして、なぜ「梅里雪山」などへ、なぜヒマラヤでも最悪の天候地帯にあるこの山へわざわざ出かけていったのか。

梅里雪山はまだ処女峰のままである。すでに還暦をすぎた身には、この山に雪辱戦をしかける気分はともかく、体力は及びもつかぬ。それでも、もしまだ京大隊が捲土重来、とむらい合戦に向かうというなら、せめて全容をのぞむペースキャンブくらいまでは同行して、十七人の若者を呑み込んだこの「魔神の山」を画布に直接描いてみたい。そして氷河の中に眠っているであろうかれらの遺体に、悲しみに耐えながら生きていくご両親からの言葉を伝えたい。

編集後記

今年二月の今西寿雄さんをしのぶ会のあと、高村会長、酒井敏明などとビールを飲みながらA A C Kにまつわる諸問題について語つた。問題のひとつとして、会員間の情報の偏りがあり、これがお互いの不信感をうむ原因になっていることに及んだ。そしてぜひ会員の情報通信紙を作ろうということになり、酒の勢いで、つい私が編集責任を取ることになつてしまった。それでも酒井、薬師両委員のご協力で形になるようなものができた。今後これを継続していくことが、会の活性化と会員相互の親睦につながると思う。国内山行など何でも結構ですので、ぜひ活発な投稿をお願いしたい。(平井記)

編集委員 平井一正、酒井敏明、薬師義美

発行日 一九九六年五月二十六日

発行所 京都大学学芸部山岳会

京都大学学芸部山岳会

京都大学農学部岩坪五郎気付

製作 京都大学北區小山西花池町一一八

(株)土倉事務所